

# 「雲仙・普賢岳噴火災害地域における

## コミュニティの再編成過程」

——島原市安徳地区<sup>かさあ</sup>嵩上げ地域（K地区）の場合——

ふじもとすえみ 藤本末美<sup>ふくま かずみ</sup> 福間和美<sup>\*1</sup> まつやまなおみ 松山直美<sup>\*1</sup> なかじまれいこ 中島礼子<sup>\*2</sup> そのだ み か 園田美香<sup>\*2</sup>  
すえながたかよ 末永貴代<sup>\*2</sup> とくながかつこ 徳永活子<sup>\*2</sup> かね こともみ 金子智美<sup>\*2</sup> じんかわ 陣川しのぶ<sup>\*2</sup> よしかわなおみ 吉川直美<sup>\*2</sup>

### 〈要 旨〉

地域における保健福祉活動を考えるにあたって、住民の住んでいる地域（地区）における生活や生活を支える地域組織活動が大きく影響していると考えられる。しかし、日常生活を営んでいる平常時には、当たり前存在として過していることが多い。しかし、災害等が発生する非常時には、平常時の生活と地区組織がどのような活動をしているかによって、生活の支え方が大きく左右されるものと考えられる。

今回、雲仙・普賢岳噴火災害地域・K地区について災害から10年を経過した現在までの、住民の生活と地区組織活動の再編成過程について、その関連を検討し新たな知見が得られた。この知見は、今後の平常時の生活と地区組織活動のあり方や、さらに非常時である災害発生時の生活と地区組織活動のあり方に応用展開できるものと思われる。

### 〈キーワード〉

地域の概観、歴史、文化 保健福祉活動 住民の生活 地区組織活動 生活情報

## I はじめに

地域における保健福祉活動を考えるにあたって、住民の生活や生活を取りまく地域（地区）がどのような地域であるか、その概観、歴史や文化等が生活に大きな影響を与えている。また、地域で生活をするにあたって、近年における子育て問題、生活習慣病予防、高齢期の介護問題、生涯にわたる健康づくり等の保健福祉課題の解決には、地区組織活動が欠かせない要件となっている。

今回、雲仙・普賢岳噴火災害地域であるS市K地区では、地区が火砕流のため崩壊した。その直後、K地区の住民は、長年住み慣れた地域を離れ、各地において被災者として生活することになった。そして、平成15年6月、災害後10年が経過し、ようやく徐々に元のK地区に戻り、これからの生活を創りあげていこうとしている。

共同研究者 \*1 県立長崎シーボルト大学看護栄養学部看護学科

\*2 長崎県島原市島原保健センター

今回、その間、住民がどのような思いで各地で暮らし、再び元のK地区に住むことができるようになったのか、その生活と地区組織活動の関わりの過程を明らかにすることを目的とした。

#### 〈用語定義〉

「コミュニティ」とは近隣、行政区といった空間の広がりとしての物理的・地理的な場および共通の関心や帰属意識、連帯感、協同の規範や制度など、共通性をもつ集団（人々）のこと。

「地区組織」とはコミュニティが組織化されていく過程を意味する。つまり、町づくりのことをいう。

「地区組織活動」とは地区における住民の自主的な組織活動をいう。すなわち、コミュニティの住民が何か問題を解決し、そのコミュニティの目標を達成していくこと。それによって、いわゆるコミュニティ意識がつくられていくこと。

「<sup>かさあ</sup>嵩上げ」とは地域全体を盛土することで土地そのものを高くすること。

## II 研究方法

### 1 予備調査

- 1) 調査期間 平成15年3月
- 2) 調査対象 雲仙普賢岳噴火災害地域のS市K地区の住民へのインタビューに協力の得られた40～70代の男女15名、およびS市保健センター保健師7名へのインタビュー
- 3) 調査内容および方法 半構成用紙の質問項目を用いてインタビューを行い、質問項目の内容を検討した。その結果、当研究の質問項目を決定した。また、S市K地区の地区踏査および深江の陣および災害復興館にて災害の追体験を行った。

### 2 本研究

- 1) 調査期間 平成15年8月～10月
- 2) 対象地区の概要

今回の調査対象のK地区はS市の南側、F町との境に位置し、土石流による大きな被害を受けた地区である。災害前のK地区は亀甲積みの石垣に囲まれた古い家が建ち並び、落ち着いた雰囲気かきあのきれいな街並みであった。しかし、普賢岳の噴火後、砂防施設ができたことで、水無川と砂防施設に囲まれ窪地になり、土石流に対する不安や居住環境の悪化が予想された。また、住宅の半分以上が土砂に埋没しており、自力でそれを排除することは不可能であった。そこで、「<sup>かさあ</sup>嵩上げ」が実行された。K地区の面積は、約93ヘクタール、災害前は324世帯が生活していた。平成13年の春に、K地区の<sup>かさあ</sup>嵩上げを含めた土地区画整備事業は終了し、現在は、災害前にK地区に住んでいた人やそれ以外の人々が生活を始めてい

る。

### 3) 調査対象

①雲仙普賢岳噴火災害地域のS市K地区地域の住民70所帯。

### 4) 調査方法

①K地区踏査および既存資料の検討

②K地区住民へのアンケート調査（基本的属性、生活実地調査）、郵送による送付70名、うち回収45名。

③K地区住民へのインタビュー（半構成的面接法で内容は、地区組織の概況、地区組織活動の実際、地区組織活動への参加状況とその内容、今後の期待と課題、住民の生活の実際について）、K地区住民へのアンケート回収45名のうちインタビューに協力を得られた34名。

### 5) 分析方法

アンケートは単純集計およびエスノグラフィーの応用により分析を行う。エスノグラフィーは、各調査から得られた情報の記録から、意味深い内容を抜き出し、コード化し分析における「構成単位」とした。分析の信頼性については、S市保健センターの保健師と大学の共同による協議によりデータの読みとりを行った。さらに構成単位の結びつきを検討し、ドメインを形成しカテゴリを形成し、カテゴリ間の関係を繰り返して検討した。さらにデータを系統的に処理するための分類学的分析として、文脈上のひとまとまりの単位の発見と分析を行った。全体構造を明らかにするために、分類図式として樹型図を作成し、下位にある記述から帰納的に組み立てられて連なりながら、より上位の語句を説明していく過程をとった。

### 6) 論理的配慮

調査対象者については、雲仙・普賢岳噴火災害の被害者であることを配慮するとともに、調査についての十分な説明を行い承諾を得るなど、論理的配慮を行う。具体的には個人データは出さない事など、地区組織の代表者の了解のもとに調査、報告会を行う。

## III 結果

### 1 調査対象者の属性

アンケート回答者45名の状況は、性別では、男性が35名、女性が10名であった。年齢構成は、20代男性2名、女性1名、30代男性4名、女性1名、40代男性5名、女性0名、50代男性3名、女性3名、60代男性9名、女性1名、70代男性9名、女性3名、80代男性3名、女性1名であった。A地区での居住年数は1年未満が19名、1年以上2年未満が15名、2年以上3年未満が10名、3年以上が1名であった。45世帯のうち、単独世帯は10世帯であった。家については38世帯が持ち家で、アパートなどの借家に暮らすのは3世帯で

あった。仕事については、27名が何らかの職業についており、自営業7名、サラリーマン8名、パート4名、その他9名であった。

アンケート回答者のうち、インタビュー協力者の34名の構成は、男性25名（20代2名、30代1名、40代3名、50代3名、60代6名、70代7名、80代3名）女性9名（20代1名、30代0名、40代0名、50代3名、60代1名、70代3名、80代0名、不明0名）であった。

## 2 身体的、精神的、健康状態および社会的経済的状况

平成15年9月現在の健康状態は、非常に健康、やや健康と答えた者が6割で、あまり健康でないと答えたのは2割であった。しかし、健康状態に不安を感じると答えた人が5割いた。うち病院へ定期的に受診している人は4割いた。病気および症状としては高血圧、腰痛、肩こり、心臓病などであった。健康保持増進のために心がけていることがある人は8割で、心がけていることとして栄養、睡眠、休養、気持ちを明るく持つ、規則正しい生活などであった。経済状況に関しては、やや満足していると答えた人が4割で、あまり満足でないと答えた人は2割であった。生活に関しては、満足している人は6割いた。また、居住している地域に今後も住みたいと考えている人は7割で、町内会、婦人会、ボランティア活動など、地域社会とのつながりを大切にすると答えた人は7割おり、社会参加が重要と答えた人は5割いた。

## 3 災害前、災害中、災害後の地区組織の変化とその活動

### 〈災害前〉

#### 1) 地区組織とその活動

①町名および人口構成については、町は4つの町内会・中安德町、鎌田町、南安德町、浜の町で構成されていた。このうち、浜の町はK地区には該当していない。さらに各町は、中安德町は、中南上、中南下、新切からなり、鎌田町は鎌田、池端からなり、南安德町は、大南上、大南下からなり、3町の人口は323人（平成3年）であった。居住の様子は大家族であり家族は一緒に住んでいた。割に子どもはいた。②町内会組織と役員の選出方法としては、町内会組織は、S市町内会連合会協議会のもとに各町内会が入っていた。町内会組織としては、生活文化部、婦人会、子どもクラブ、その他となっていた。役員の選出方法は町内会長が寄り合いにより5～6人推薦し、話し合いにより順番で互選し決定した。役員はほとんど男性であった。

#### 2) 広報の方法

多くは回覧版で町会長・班長が一軒一軒持って回った。また、行事毎に「ふれかたさん」があり、この任期は1年で持ち回りであった。その他は市政だより等であった。

#### 3) 活動内容と状況

①町内会活動として、(a)祭り、(b)運動会、(c)婦人会、(d)納税組合、(e)地区カルチャー、(f)行政の活動等が行われ多くの住民の参加があった。中には、仕事がいそがしい、学生であったなどの理由であまり参加しなかったと話す者もいた。(a)については、八幡神社の秋祭り「かなめ祭」があり、各町合同の祭りであった。祭りは御輿が各町の各家庭をまわり、子どもも一緒についてまわり楽しかった。御輿の前と後ろには「ぼうちょう」という監視役がついており、担ぎ手ははっぴをきて練り歩き、各家庭ではお酒やお菓子を準備して待っていた。各町には休憩所があり酒を振るまい、女性はたきだしでごちそうをつくり接待した。この祭りは2日間行われ、鎌田町の下の池のところで泊まることになっていた。また、婦人会では神楽踊りを奉納し、奉納相撲も行われ一大イベントが展開されていた。(b)では、バレーボールやソフトボールが行われ、反省会が一番の楽しみであった。(c)では、よく夜に集まりをもち、旅行も行った。(d)では、税金を集めていた。(e)では、公民館で生け花を習うなど地区カルチャーが行われていた。(f)では、島原市の保健師によるの健康相談や家庭訪問が行われていた。②地区でのしきたりとして、葬式は土葬で、土を掘るなど町内会で行っていた。その他の手伝いもあり、地の人のルールがあった。

#### 4) 活動の場・公民館の使い方

①町内会活動では、活動の運営・役員決めなどのために会合がよく行われていた。②冠婚葬祭では、公民館での結婚式は婦人会が食事の用意をして、他にも呼びかけていた。また、葬式では公民館を使い町内会全員で手伝いをしていた。③催し物では、公民館に集まりことあるごとに話し合っていた。

### 〈災害中〉

#### 1) 地区組織とその活動

①地区組織の状況は、災害によって地区が壊れ、災害後の地区造成により川になった所にも一部集落があったが、全てなくなった。家だけでなく、お墓も、田畑も流されたので引っ越さなければいけない事態となった。こうした状況下で地区組織も解体した。②しかし、従来の地区組織で「連絡ルートがあった」では、避難先をかえるごとに、元の町内会長に連絡するようになっており、それによって、元いた町内会の人がどこにいるのか町内会長を通じて知る事ができた。全員の生活の動きが把握できた。また、避難生活の時は、連合会長が町内会の事を世話していた。どこへ避難しても、元の町内会に属しており、会長を中心に団結したまとまりがあった。この間、お寺で月に1回仏様の話を聞く集まりがあり、その時が情報交換の場であった。一方、「連絡ルートがなかった」では、災害時の時に、具体的な情報が共有できなくて駆け回ったと言っている。この地に安中町づくり委員会や三角地帯の委員会があり、住民の意見をまとめることができた。また、生活物資・救援物資の配給があった際には、町内会長が配っていた。③活動について、町内会活動としては、敬老会や旅館に町内の皆で集まって親睦会を行い、お互いを慰めあいながら歌を

歌い、一日を過ごした。一方で、町内会の行事や新年会など持つ余裕もなかった、地区組織にはかかわっていないという状況の人もいた。地域のしきたりについては、葬式は仮設住宅への連絡があり、情報を伝えて集まることができた。お寺の住職は、災害中も法事に呼ばれて出向いたり、仮設住宅へ元の住民が来ることもあった、また、法事や葬式へ参加することで、住民にとっては情報源となっていた。被災者同士の交流については、お互いの生活の情報を交換し、悩みを話し合う、一人暮らしの人を世話をする、夕涼みをしながら話をするのが楽しみであった。被災者同士なのでお互いの気持ちも理解でき、外で集まって話をしたり、電話をかけ連絡を取り合う、それらが精神的な支えになっていた。時には夜中まで話し合うことで、それが安心感につながっていた。④市や県への働きかけは、市や県へK地区住宅地造成への陳情への取り組みを行った。住民全員の同意書を集めるのは大変であったが、みんなの希望として、宅地が造成され、住民が元の地域へ戻って暮らすことを強く望んでいたもので、役員を中心に取り組み、市役所へK地区の会長が何度も住民の意見を持っていった。

## 〈災害後〉

### 1) 地区組織とその活動

①地区組織の再編成の状況では、3町（安徳町、中安徳町、鎌田町）6町内会（鎌田、池畑、中南上、中南下、新切、大南下）で構成され、世帯数は安徳町人口931人（33世帯）、中安徳町人口119人（34世帯）、鎌田町人口54人（16世帯）である。住居は災害前の3分の1の世帯数になってしまい、人が戻ってきて欲しいとの声が聞かれた。また、子どもがいる世帯では遊び友達などがたくさん欲しいと願っている。町づくりへの意見と実際については、6部落が合併し、平成12年に7町内会が設立され、もといた町内会に加入した。同じ町内でも地区が交じっており、違う町内会に加入する人もいる。早く町づくりをする必要があり、今の町内会ができる時はみんなに町内会が出来るよう声をかけた。町内会の加入については、町内会には未加入の人もおり、アパート入居者は8軒中1軒のみの加入であった。一方、町内会に加入している人は、町内会長の勧誘で加入した、町内会に加入しないとやっていけない、町内会に入らない人もいて困ると話している。帰ってきていない人への思いでは、周囲の人は昔からいた人も多かった、早く帰ってきて欲しい等があげられた。②地区組織再編成の様子では、(a)組織及び役割については、組織の構成は会長、副会長、その下に班・老人会・育友会・運動会・寺の総代からなる。役割の決め方は、会長や副会長の家で話し合いをして選出する。(b)情報については、回覧版や市政だより・公民館だより、会長・副会長からの連絡により情報が入ると話している。情報が入らないと答えた人では、最近は所帯数が少ないため、以前より口からの情報が減り、世間的な細かな情報が流れて来なくなったと話している。(c)集まりの場については、平成15年8月に公民館ができた。公民館への期待については、町内会が一番大事であると考え、公民

館を開放してもらい、一つの核としてこれから活用したいと話している。組織の活動としては、(ア)夢計画、(イ)葬式の手伝い、(ウ)市民清掃、(エ)老人クラブ・旅行・運動会・ゲートボール、(オ)祭り・厄払い、(カ)運動会、(キ)防災訓練、(ク)新年会・年祝、(ケ)お寺の集まり、等が行われ、多くの住民が参加した。中には、仕事が忙しい、1町内会の人数が少なく行事は無理、まだ活動が始まっていない、行きにくい等の理由で、参加しなかったと話す人もいる。その他に、継続的な活動は昔ほどない、行事などの声かけをしてもらおうと参加しないと申し訳ない気持ちになると話す者もいた。(ア)については、地区全体の住民の意見聞き、発言をまとめるなど計画に全面的に関わった。フェスティバルではNPO法人として参加するなど交流を始め、なじみのある人に会えて嬉しかった。(イ)では、班毎に協力して炊き出し等のお世話をするが、最近は葬儀屋さんがおこなってくれる。(ウ)については、町会で行われている市民清掃では、家族皆で参加している。(エ)では、年に1回は老人会の総会が開かれている。活動内容は敬老会、草刈り、旅行、ゲートボール、運動会等が行われ会員の参加があった。(オ)については、昔の神社の祭りが復活し、以前と変わりなく町内会で厄払いが行われている。しかし、祭りの担ぎ手を心配する人もいる。(カ)については、「K地区」としてチームを編成して参加した。今後は小学校の運動会と一緒に活動する予定である。(キ)では、今度集会所で行われるが、これが新しい集会所ができて最初の集まりである。(ク)では、今でも新年会、成人式などの年祝を1月にしている。(ケ)では、行くように心がけている。その他安中地区では、安中公民館に集まり、花、踊りなどを行っている。

#### 4 災害前、災害中、災害後の日常のくらしの変化

##### 〈災害前〉

##### 1) 仕事について

①種類としては、(a)農業、(b)酪農、(c)製造業、(d)でかけ、(e)商売、(f)家事等に分けることができる。(a)については、たばこ、米、びわ、すいか、メロン、キャベツ、ほうれん草、葡萄、きゅうり等を世の中の流れに応じて作物を変えながら生産していた。(b)は、家族ぐるみで行っていた。(c)はそうめんを製造していた。(d)島原鉄道や網会社など地元でのでかけであり、中には神戸での仕事についているものもあった。(f)は親を自宅で介護していた。中には、畑は全部貸していた者もいた。②仕事ぶりは、夫婦でまたは祖父母につかえるなど、365日働きづめであり、夫の死亡の後には一人で畑をきりもりしていた。畑へは歩いていくことができた。でこぼこした土地で、隣の家との境はほとんどなかった。③システムについては、田圃は一軒ずつまとまって助け合い作業をしていた。部落で農業の研修会が行われ、会費は農業協同組合からの補助金で賄っていた。また、鎌田地区ではグループを作っていて、指導などしていた。④つながりについては、農家同士でつながりは強かった。

## 2) コミュニケーションについて

①良く話していたとして、(a)いつも誰かに会うことがある、(b)食べ物や野菜などのやりとりがある、(c)いろいろ助け合って暮らしていた、(d)お酒など飲むことが多かった、(e)地の人たちで子どもの頃からのつながりがある。(a)では、いつも誰かにあうことができるとしており、洗濯を干すとき、畑にでたときの挨拶、気軽に声かけをして世間話や農業のことをしゃべる。近所の人や知り合った人の家が近接していることや玄関が向き合っていたので自然と集まって、よく話し、お茶のみをした。また、人と人の接触や交流があった。(b)では、食べ物や野菜などよくいただいていた、また、家の前に野菜がおいてありそれをいただいていた。(c)では、いろいろ助け合って暮らしていた、仕事が忙しくても近所の人とたわいのないことを話すことで、リラックスできていたように思う。(d)ではお酒を飲む機会など集まる時が多かったが、これが仕事の励みになっていた。(e)昔から知っているとして、お隣三代までわかるつきあいをしている。つながりが密である、助け合いの精神がある、人脈につながる、人間関係が広い、家族の交流が多い等あげている。②話していないとした人は、ちょっとしたうわさがすぐに広まるのが怖いので余り仲良くできなかったと話している。

## 3) 環境について

水や空気がよく周りに田圃がたくさんあり、井戸・湧き水で米を作っていた。ゆったりと住んでいて何の心配もなかった。生活の施設では、近所に小さい店が3軒あり、酒屋もありすぐに買い物をするのができて便利であった。また、派出所や郵便局、病院も近くにあり良い環境であった。

## 〈災害中〉

### 1) 災害中の周りの様子と生活

①災害直後の様子について、普段は大人しい水無川がスゴイ音をたてて次の日まで湯気が残るほどの熱を持った大きな石を搬んでいた。灰については、噴火が続いたときは、いつもどんよりと曇っていた。火山灰が降ると目が痛くなるので、ヘルメットとゴーグルが支給されていた。学生が通学する時はヘルメットをかぶっていた。車で走っているとフロントガラスはすぐに灰が積もって見えなくなるので、ワイパーをかけるが追いつかなかった。そんなとき、道路沿いの人がホースで水をかけてくれたりした。そんな行為がとてもありがたかった。また、近いところでも迂回しなければならなかったので交通が不便であった。②体育館生活については、最長で三ヶ月ほどであった。雨の日は体育館はうるさかった。体育館は、クーラーがなく、ムツとして足の踏み場がなく、息が詰まる程であった。昼一枚に二人ほどで生活した。食事は、毎食折り詰め弁当であった。洗濯は、共同の洗濯機で行っていた。長い間、外には干せなかった。風呂は、南風楼ホテルや福祉センターを利用していた。こうした中で、元の家心配があり、警戒区域でありながら、災害に



あった家を掃除に行ったり、深夜2時にこっそり家に戻り、荷物を取りに行った。自分の家を見に行くだけでホッとした。体育館生活の後には、それぞれの家族によって異なっていた。③仮設住宅では、部屋の状況は、平屋建ての2軒1棟で、壁ひとつで隣の家であった。家族の人数によって広さが異なり、六人家族で、キッチン4畳に6畳二間で家財道具は揃っていた。住居年数は、3～5年ほどである。場所は、三会、新湊、栗山にあった。中には、一戸建を借りる者もいた。④市営住宅・県営住宅の居住者は、住居期間は、様々であるが長い方で8年ほどであった。住まいは、鉄筋でとても冷たい感じがした。誰にも会わない拒絶された気持ちになった。

## 2) 地域・居住・家の様子

①災害に遭わなかった人は、家族は島原に居るので、生命の心配より経済面の方が心配であった。②災害にあった人では、家が流された者は、一瞬で何もかも流された。家を新築して2、3ヶ月で土石流にやられたという者もいた。家が流されなかった場合は、状況としては、家がほとんど被害にあわず、一時もどったが土石流に囲まれていた家、全部流された家、土砂だけ少しもった家や床下浸水のための家、納屋だけ流されたなど被害は様々であった。自分の家に電話をかけてつながれば、自分の家がまだ有るという証だった。職場で土石流で家が流される映像がテレビで流れるたびに、おばちゃんの家は大丈夫かと心配してくれる職場の人がいた。暮らしとしては、寺の周辺の20軒は流されず、戻ってきていたが、隣人とはなかなか会えず、家の灯りが見えると「今日も生きている」とホッとしたと話している。③元に戻りたいでは、元の所にもどりたいという思いが強く、転々と住まいを変えてもこの場所に戻ってこようと思っていた。何の楽しみもなく、もとの家にかんがえてもどりがたかった。あまりにも大変恐ろしい出来事だったのでもうもどれないとばかり思っていた。地区の近くに住んでいた人から「早く戻ってきてください、寂しい。」といわれ近所の人も戻ってくることを楽しみに待っていてくれた。一方で、他に家を建てるという場合もあった。<sup>かさあ</sup>嵩上げができるのを待ちきれずに、ほかの地区に家を買った者もいた。

## 3) 所属と気持ち

①家族のかたまりについては、家族別居となった状況としては、災害前は家族と一緒に暮らしていたのに災害中の仮設住宅では、狭いため高齢者と若い世代とで別れて生活をした。それがきっかけで今でも別居しており、仮設で別々に暮らした家族は、その後、家族関係がギクシャクしているところもある。また、当初は家族がそれぞれの親戚の所へ行き、ばらばらになったところもある。一方では、ばあちゃんや子供のため仮設は無理と考え、一緒に住める家を借りた家族もいた。②気持ちや健康状態については、仮設住宅では、ほとんど地区の人とは会うこともなく、みんなで寄ることもなく、近所付き合い程度であった。仮設では、近所の人と会話がなくて寂しく、子供たちに長電話をした。さらに、先の見通しが立たず、特に住居が定まらず不安で精神的にも辛く落ち着かない生活が

長く続いた。この間のトラウマとして、夕方5時のサイレンを聞くと自然に涙が出たり、恐ろしい目にあったと思い出したり、避難生活を送っている際は、見下げられた見方をされることもあり、避難民のような感じであった。一方で、地区外や職場で仲良くなった人もいて、よくしてもらい、お互いに助け合いの心も芽生えた。健康状態では、夫の母親を特養に入所させたり、祖母が痴呆だったため、病院の計らいで病院にあずけたりした。避難していた体育館で、医者に血圧を測ってもらおうと高かったためそれから薬を飲み始めた者や、股関節を痛めて愛野まで通院し二度手術をした者や、胸が苦しく、病院に行くと、これは「仮設病」だねといわれたなど、災害を機に具合が悪くなったと訴える人がいた。

③仕事については、市の体育館に避難しているときも法事などに呼び出されたこともあり、体育館から職場に通勤していた。災害のため農業ができなくなり、家族それぞれが働きに出るようになった。パートで皿洗いや、食品工場に働きに出たり、ハウス立ての仕事にいたりであった。それぞれが自分の土地に入れず、収穫を目前にしていた作物が灰でだめになるなど農業できないのが辛く、さらに、農業収入が全くなり、経済的に苦しくなった。この間の④支援と活動については、島原市保健センターから週に1度健診に来てくれたことが心強かった。支援物資も届いていたが、なかなか意に沿うような品物がなかった。町の活動については、町内のかかわりが大切であるので地区としての運動会を提案したり、北海道の有珠山との交流もあった。

## 〈災害後〉

### 1) 生活概況

①人口構成について、年少人口については、子どもの声はほとんど聞かれず見かけない。しかし、子どもに会った時はよく挨拶や話をする。挨拶や声をかけてもらえるだけで元気が出て嬉しい、子どもがいれば活気づくと思う。現状としては、平成16年3月に寺の裏に保育園が完成予定である。若者の流出については、若い人が出て行ってしまう心配がある。老年人口については、祖父母がいる家は前からK地区にいる人が多く、戻ってくる人も高齢者が多い。若い人が戻ってきても、他に家を建てたり、二世帯になったりしているところもある。しかし、居住形態は一人暮らし、特に女性の老人の独居が多い。また二人暮らしと答えた人では、夫婦二人きりや祖母と二人きり、昼間だけ子どもと二人きりであると答えている。転入については、息子夫婦と同居、結婚を期に転入してきたとしている。②仕事については、(a)出掛け、(b)農業、(c)酪農に分けることができる。(a)については、サラリーマンばかりになった。(b)については、宅地を農地にし、週に一度息子が来て農業をする。長男夫婦と夫が農業に携わる。(c)については、主に息子が酪農をしている。以前、酪農をしていて、また新たに布津町で酪農を始めたがとても大変である。その他に、働きたいが仕事がない。③健康管理については、肺ガン、脳梗塞、癌などの既往があり、リハビリに忙しい等であるが、前向きに病気を治して旅行に行きたい、みんな年をと

り自分の健康管理も大事と思っている者もいた。④ネットワークについては、身内に医者が多く、夫のつき合いネットを利用して、いつでも相談できるので安心である。また、民生委員が福祉サービスを紹介してくれる。福祉に関しては、災害前のネットワークで何とかやっていたとしている。⑤地区への期待は、地域住民で子どもを育てていきたいと思う。また、災害について、二度と起こらないように今後、何代も平和でありますようにと記念碑にお祈りをしている。⑥戻ってきたいが戻れない現状については、他所に移り住んだ人が多く、戻れない理由として、宅地造成の時期が遅かったことや経済的な問題があげられる。⑦生活については、花畑の世話や草むしり、自分で食べる程度の家庭菜園を行う、高齢者は花を作り水かけの役割をして生活を行っている。中には、共働きになった人もいた。⑧生活環境については、宅地が畑に変わり、ダム建設、借地等として土地利用がなされている。⑨生きがいについては、釣り、園芸、日記、子どもたちと会う、災害についての交流が生きがいとなっている。⑩住宅については、住宅立地環境は、内部環境について借家と持家に分けられ、住み始めてから1～2年になる。外部環境について周りのハード面の環境がよくなったという声もあるが、周りに店や施設がないことによる利便性の問題、周囲に家がなく天災被害の危険性に対する家周辺の問題、家の中の様子の変化による心理的な問題があげられた。家を建てた人の気持ちについては、元の場所が良いと答えた人は、住みなれた場所に戻れたことの喜びや感激、結婚を期にK地区に家を建てた、家族と一緒に暮らせるようになって安心したなどの声が聞かれた。さらに、寺が近くに越してきてよかったと話している。⑪近隣関係については、(a)友人とのやりとり、(b)助け合い、(c)新しい関係づくり、(d)冠婚葬祭があげられ、(a)については、野菜などのおすそ分けや、挨拶等の声かけ、家に遊びに行く、以前よりも付き合い方が積極的になった人、一方、変化がない者もいた。(b)については、お互い助け合う気持ちが必要だと考えている。(c)新しい関係を築いている途中ではあるが、遠くの身内よりも地域の人たちと一緒に生活している意識が強くなった。(d)については、元の地区の人々が主である。近隣関係がないと答えたひとは、出会う場所がない、住宅が増えず交流する人がいない、たわいない話がない、新しい人とのかみ合わせが心配、元の近隣の人と会う事もなくなり付き合いの希薄化がみられると答えている。

## IV 考察

### 1 災害前と地区組織活動

#### 1) 地区の外観と住民の生活が、地区組織の形成に影響を与えている

K地区の外観は、200年前に雲仙普賢岳噴火災害による大きな被害を受けている。しかし、その後も、K地区は、有明海に面している地域では漁業が、内陸部では肥沃な土地を利用して農業が盛んであった。農業地域では、広い農地面積を有しており、各所帯は少し

ずつ集合して建てられており、家はあけっぴろげで、鍵をかけることもなく、家の玄関が向かい合っているなど、声をかければ話し合える状況であった。仕事は365日休む暇もないほどであったが、農作業をすすめるにあたっては、一軒ずつまとまって助けあいの作業をし、納税組合をとおして、研修会を行うなど近隣のつながりが強かった。

このような生活の背景をうけて、地区組織は、男性を中心に組織化され運営されていた。殊に広報の仕方として「ふれかたさん」がおり、一軒一軒を持ちまわっている。大きな活動としては、八幡神社を中心の「かんなめ祭」があり、この祭りが地区組織の大きな行事となっており、住民が一丸となって一泊二日にわたるにぎやかな祭りを展開している。この祭りをとおして、人々がふれあい、一年間の一番の楽しみをつくりあげている。

磯村<sup>1)</sup>によると、「わが国の住民自治は、終戦直後に地方分権とか住民参加とかが強く主張され、制度としても整えられながら、いつの間にか逆戻りしつつある。」としているが、町や村では、いざ知らず、K地区においては、文字どおり住民の生活が、住民自治の力を実際活動として展開しており、地区組織の形成に影響を与えていることがわかった。

## 2) 地区組織やその活動の持つ力が、住民の生きる力・QOL に影響が大きい

K地区における災害前の活動を見てみると、祭り、運動会、婦人会、納税組合、地区カルチャーなどをあげることができる。中でも、祭りは、事前から御輿や担ぎ手などが寄り合って準備がすすめられ、各町が合同の祭りを創っている。男性は祭りの中心を担い、女性は各家庭でお酒やお菓子を用意して、各町の休憩所で炊き出しをしてご馳走をつくり酒を準備して、御輿が回ってくるのを待った。鎌田の下の方の池のところで泊まり、婦人会は神楽踊りを奉納し、奉納相撲が開かれるなど、住民の総力をあげて、2日間にわたる大イベントを展開している。このように、住民の生きる力を引き出す祭りを行うことができる人々と、組織の力は何にもまして生きる目標となっていたと考えられる。

このような地区組織をあげた活動を展開するためには、コミュニティが成立している。中川<sup>2)</sup>は「簡単に言えば、生活様式を同じくする地縁集団がなくてはならない。欧米の場合、単に生活様式が同じというだけでなく、生活様式的前提になる信条が共通であるという条件が必要である。」コミュニティに対する組織を地区組織と呼び、その活動から住民の生きる力が創られ、生きるQOLに影響が大きいと考えられる。

中川<sup>2)</sup>は、「コミュニティは社会生活の社会的存在の共同生活の焦点であるが、アソシエーションは、ある共同の関心または諸関心の追求のために明確に設立された社会生活の組織体である。アソシエーションは部分的であり、コミュニティは統合的である。」と述べている。

このことは、K地区の祭りの凝集におけるQOLへの影響でみるように、保健福祉活動におけるコミュニティアソシエーションは、保健福祉課題という関心の追求のために組織され、活動することによって、その活動の持つ力が、住民の生きる力となると考える。さらに、この保健福祉課題の関心は、宮坂<sup>6)</sup>によると、「わが国では、明治12年から19年に

かけて起こった全国的なコレラの大流行時の衛生組合が地区組織活動の始まりである」としている。さらに、中川<sup>2)</sup>は、「コミュニティはどの最大のアソシエーションよりも広く自由なものである」と述べている点に注目したい。

3) 地区組織活動が、住民の生活・文化の活性化につながっており、住民の日常生活を支えている

K地区では、農業、漁業が主な仕事となっており、仕事の上で「田圃は一軒ずつまとまって助け合い作業をしていた」「農業の研修会が行われていた」など、日常の生活が地区での組織の基盤となっている。また、「近所の人や知り合った人が家が近接していることや玄関が向き合っていたので自然と集まって、よく話し、お茶のみした」など日常のコミュニケーションの積み重ねや「祭り」にみる凝集した行動が、住民の生活・文化を活性化していたと考える。

K地区にみる地区組織活動は、住民の自治意識の高さに通じるものと考えることができる。磯村<sup>3)</sup>は、「自治意識の形成過程を、地元意識、住居意識、住民意識、市民意識に分析している。地元意識では、一定の場所に居住し定着し、そこで共同生活をするものの一部がなんらかの形で統制的な地域結合を創って、その共通利害を強調する意識である」。として、神社の氏子総代などが中心になってつくられる集団への帰属意識を例にあげている。居住意識では、人間が一定のところに住居をもつことによって自然につくられる人間関係を基盤とした地域的結合意識である。例として街灯をつけるなど消極的な状態の意識であるとしている。住民意識は、生活の欲求を積極的に表現し、その実現に向かって共同体行動を起こす。この積極的意識の背景には、住民としての生活が守られているかどうかという権利意識が潜在するとしている。このように地元意識、居住意識、住民意識が重なって日常の生活が営まれ、その住民自治意識の現れが、地区組織の活動に反映していると考えられる。

## 2 災害中と地区組織との関わり

### 1) 新しい居住場所（仮の住居等）と地区組織への関わりについて

新しい居住場所（仮の住居等）については、災害による仮設住宅やその後K地区の場所に戻るまでの居住場所をさしており、その場所も家族や親戚そして仮の住居と考えて一時居住した場所のことをさしている。その居住形態はさまざまで、期間もK地区が形成するまで10年を要している。その間、転居を繰り返しながら、新たに居住する地区との関わりを持ちながら、K地区の人々と情報交換をしている、K地区の組織のリーダーからの呼びかけに賛同したり、意見を集約している」など、いつ、どのようにしてK地区にもどることができるのか検討しているといえる活動を継続してきた。一方、K地区のリーダーは、K地区の住民の意識を継続させ、行政機関への要望を諦めなかった。

このような地域というまとまりが、災害によって崩壊した状態の中で、どのようにして

K地区のまとまりを持ち続けることができたのか。

中川<sup>4)</sup>によると、共同体意識について、「定義をし直すなら、コミュニティは、一般生活目標のための統合集団で、その性質上、中立的かつ生活の普遍的基盤となる土地の上に成立しやすいが、それが絶対ではなくて、ユダヤ人のように地縁を越えたコミュニティを成立させている場合も認められる。アソシエーションはこれにたいして、特殊生活目標のための統合集団で、コミュニティによって満たされない、もしくは不十分な目標追求のために存在するものであるから、コミュニティ生活の上にアソシエーション生活が上積みされることになる。」としている。K地区における災害中と地区組織の関わりにおける、住民間のコミュニケーションの継続と、リーダーの長期にわたる持続した活動は、K地区のコミュニティの再編成過程に影響を与えた大きな力となったことを理解することができる。つまり、一時的であるとは言え、地縁を越えたコミュニティを形成することによって、K地区が<sup>かさあ</sup>高上げを成し遂げるに至った。

## 2) 住民達の気持ちを繋げていたもの

K地区住民は、平成3年より住み慣れた家が土石流によって流される、火砕流によって家が燃えてしまう、大切にそだてた農作物が灰によってだめになってしまうなど、口では表現出来ない被災体験をしてきた。K地区住民は、住みなれた地域から離れ、集団での落ち着かない体育館生活、狭い仮設住宅、あまり交流がなく寂しい県営住宅と転々と住まいを変え、転職を余儀なくされた。その間の痛み、苦しみを理解し、慰められるのは、その地域の被災体験をした住民同士であった。また、K地区は自然豊かな農村帯区であり、昔からの地域住民同士の強いつながりがあり、地域交流が盛んな町で、土地への強い愛着心を持っていた。一人一人の住民の「ここへ戻ってこよう」という思いと、苦しみを分かち合った思いとが、10年という長い歳月を乗り越えさせた。目に見える地区組織は災害によって崩壊したが、目に見えない人と人のつながりや、住民のつながっていたいという気持ちが「戻ろう」という思いをより強固にした。

## 3 災害後・現在の地区組織と地区組織活動に期待すること

### 1) K地区の地区組織の現状と活動について

K地区は、平成12年に南安德町（人口93人・33世帯）、中安德町（人口119人・34世帯）、鎌田町（人口54人・16世帯）の3町に6町内会が出来た。町内会は町内会長を中心にお互い声をかけあい加入を勧誘したが、K地区には罹災しない人も住んでおりその加入率は低い。組織の構成は会長・副会長、その下に班があり、老人会・お寺の総代等、災害前と同様の組織が編成されている。活動としては、老人会やゲートボール、運動会、市民清掃、草刈、防災訓練、新年会、厄払い等の地区組織活動が始まっている。中でも、平成15年秋に神社の祭りを復活することができ、この祭りを通してK地区の魂の再編成への動きが確実につくられてきたと考える。また、お寺が地域に再建できたことが、住民の安心感につ

ながっている。さらに、平成15年8月に公民館が出来たことは、住民にとって今後重要な活動の拠点となっていくものとする。

## 2) K地区の住民の生活状況と保健福祉活動に期待すること

K地区に戻ってきた人は、高齢者が多く、居住形態としては、独り暮らし、女性の独居が多く、子どもの姿や声をあまり聞かず活気がない。また、仕事も災害前は居住地の近くで営んでいた酪農や農業が多かったが、災害後はサラリーマン等、他の地域に出かけて仕事をする人が多く、K地区の近くで仕事がないことや、災害により転職や出稼ぎ等に変わった人が多い。しかし、気持ちとしてはK地区に戻ってきて暮らせた安堵感が強く、日常生活は家庭菜園や花作り、災害等に関する近隣との交流などであり、今後、K地区で災害前のように町内会のつながりを密にし、安心して暮らしていきたい様子がうかがえた。

保健福祉活動面では、災害前のネットワークが活かされ、班長や民生委員が相談にのってくれるという声が聞かれ、これからの活動がすすめられていくものと思われる。

## V おわりに一地区組織活動の今後の展望一

以上、K地区に於ける災害前、災害中、災害後の住民の生活と地区組織活動のあり方について検討をすすめた。平成16年2月27日に現地報告会を開催して、今後の地区組織活動の課題と活動方向を模索することにもなった。当日は、K地区住民のうち地区役員はほとんど出席し、S市保健センター保健師、大学教員との間で、熱心な意見交換がなされた。保健師からはインタビューを通して地域の人々の意見や思いと感想が出され、出席者からも約10年間でふり返る形でいろいろな意見や思いが語られた。

この報告会では、今後K地区で人々が求めている災害前のような親しみのある、安心して暮らせる地域づくりについて話し合うことであった。地区役員からは、独居や夫婦世帯の高齢者が多いこと、災害に遭わない他地域からの新しい住民も住み始めていること等を考えた上で、活動をどうすすめるかについて多くの意見が出され、保健師からも高齢者を対象にした保健活動の必要性についての意見が出された。結果、平成16年3月中に、これからの保健福祉に関わる地区組織活動を始めることが決定した。

本研究によって、K地区では、新たな課題の取り組みを開始するという地区組織をあげて活動を開始するきっかけがつかめたことは大きな成果であった。

以上の検討から得られた成果は、平常時の生活と地区組織活動のあり方、また、非常時の生活と地区組織活動のあり方への示唆が得られ、殊に非常時には地区組織を再編成し、新たな活動を試みるなど、住民の生活を地区組織の状況にあわせて支援していく方策を見出すことが必要である。

### 引用文献

- 1) 磯村英一：地方自治を考える（第4版），51，日経新書，1968
- 2) 中川剛：町内会 75，中公新書，1977
- 3) 磯村英一：地方自治を考える（第4版），155-156，日経新書，1968
- 4) 中川剛：町内会 76，中公新書，1977
- 5) 中川剛：町内会 73～74，中公新書1977
- 6) 宮坂忠夫：地区衛生組織活動－衛生教育 213 續文堂出版 1958

### 参考文献

- 1) 青井和夫，綿貫醸治，大橋幸：今日の社会心理学3 集団・組織，リーダーシップ
- 2) 雲仙・普賢岳 噴火災害を体験して，島原普賢会，長崎 2000
- 3) 平成島原大変 雲仙・普賢岳噴火災害記録集，長崎県島原市 2002
- 4) 米山俊直：集団の生態 日本放送出版会 1968
- 5) 似田貝香門：都市社会とコミュニティの社会学，放送大学出版会，1994
- 6) 磯村英一：人間にとって都市とは何か，日本放送出版協会，東京，1968
- 7) 金川克子：地域看護診断?技法と実践?，東京大学出版会，東京，2000
- 8) 島原市：明日への飛翔，市制施行60周年・島原市市勢要覧，長崎，2000
- 9) 「雲仙・雲仙・普賢岳噴火災害を体験して」編集委員会：島原普賢会，長崎，2000
- 10) 中西睦子監修：地域看護学，建帛社，2003
- 11) 藤本末美：地区組織活動の歴史・概念・分類，保健婦雑誌第57巻第7号，医学書院，2001
- 12) 太田一也聞書：普賢岳鳴動す，西日本新聞社，1999
- 13) 阪神・淡路震災下の看護婦たち，医学書院，1995
- 14) 若林桂史：災害の心理学とその周辺，多賀出版，2003
- 15) 藤本幸也：心の断層，みすず書房，2002
- 16) 兵庫県震災復興研究センター：大震災と人間復興，青木書店，1966
- 17) 日本建築学会編：地震から暮らしを守る町づくり，彰國社，1998
- 18) 太田保之編著：災害ストレスと心のケア，医歯薬出版株式会社，1996
- 19) 日本災害看護学会誌：日本看護協会，1999
- 20) 保健婦の地区活動を再考する－ニーズとは何か－，保健婦雑誌，医学書院，1999，9
- 21) 保健婦の地区活動を再考する－地区とは何か－，保健婦雑誌，医学書院，1999，8
- 22) 保健婦の地区活動を再考する－ニーズ把握事例集－，保健婦雑誌，医学書院，1999，10
- 23) 地域保健活動の焦点?21世紀を目前，保健婦雑誌，医学書院，1999，10
- 24) 宮坂忠夫他編：保健学講座12 健康教育論，メヂカルフレンド社，2002
- 25) エリザベスT. アンダーソン，ジュディス マクファーレイン編集：コミュニティ アズ パートナー 地域看護学の理論と実際，医学書院，2002

### 謝 辞

本研究において，S市役所市民課，災害対策課，保健環境課及びS市保健センターの職員の皆様には，研究の当初から完了まで多大なる協力を頂きました。ことに，S市保健センターの保健師の皆さま

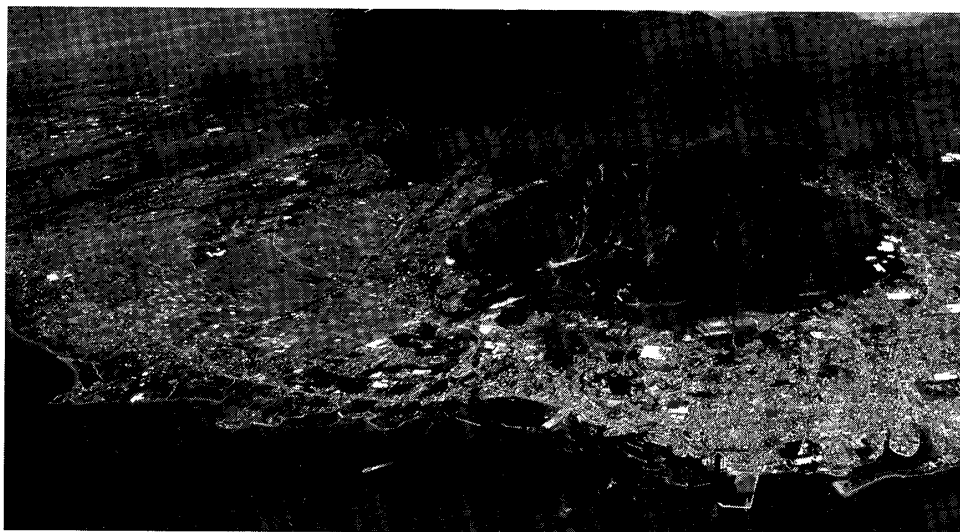


まには、当調査研究に関して共同研究者として参加いただき、当初の目的を達成することが出来ましたことに深く感謝いたします。

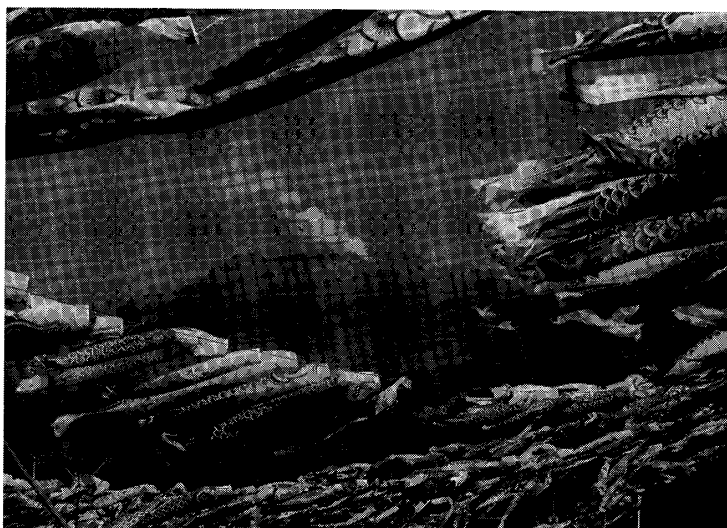
また、調査においては、K地区のYリーダーさんをはじめ住民の皆さまにはアンケートならびにインタビュー及び報告会での討議に参加、協力していただき心よりお礼申し上げます。

資料

災害前



災害前 普賢岳の様子

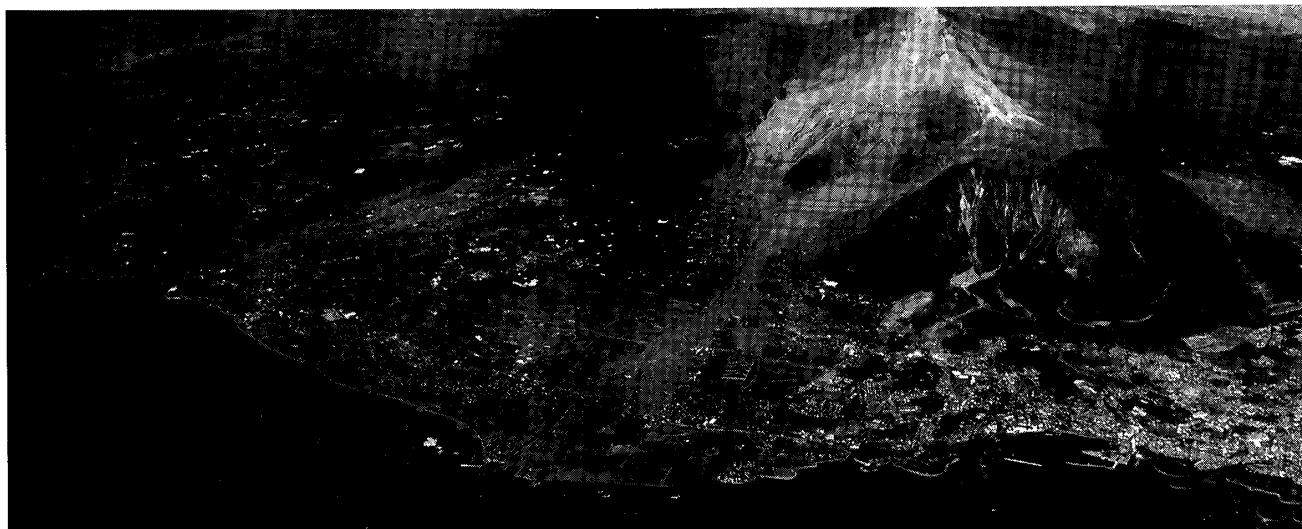


こいのぼり (H2,5) : 翌年から休止

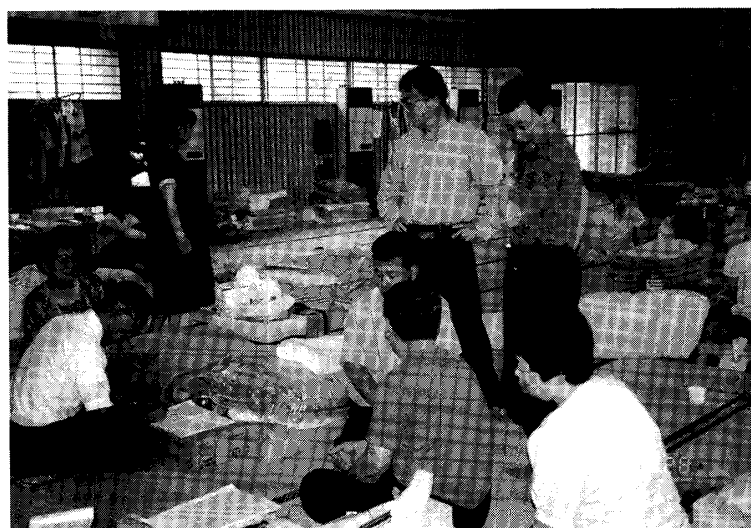


三角地帯災害前の様子

災害中写真



避難生活の様子（体育館）





避難生活の様子（仮設住宅）



災害後

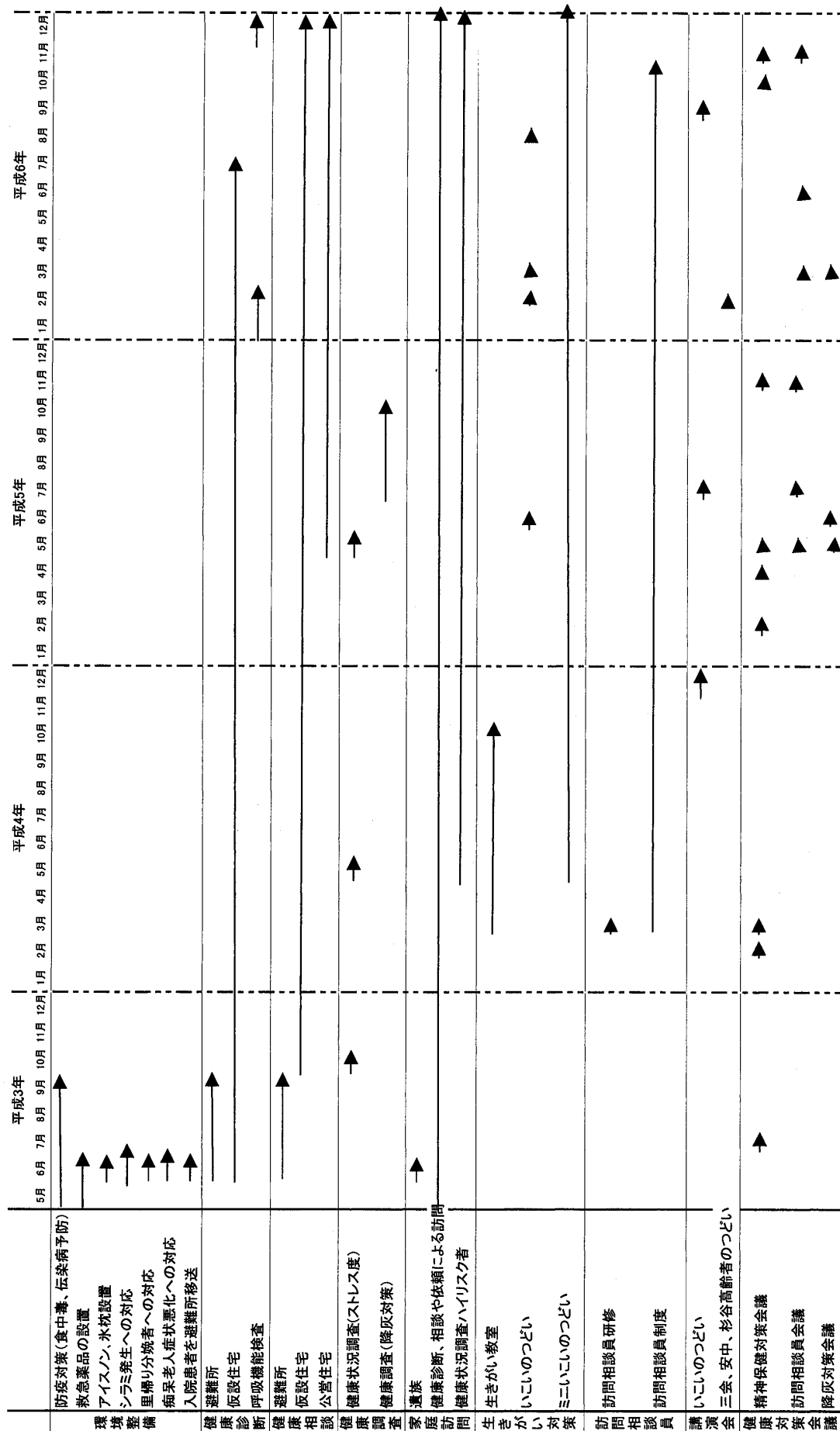


災害後 普賢岳の様子



かさあ  
嵩上げ工事の様子

雲仙・普賢岳噴火災害における保健師活動の経過



かさあ  
高上げ地区の実現までの経過

年	月日	災害の状況	月日	住民の動き(協議会)	住民の思い	生活状況の変化
平成2年	11.7	雲仙岳噴火				
平成3年	5.15 5.20 6.3 6.30	水無川で土石流発生 溶岩ドーム出現 大規模火砕流発生 大規模土石流発生			早く、元の土地での生活に戻りたい	・体育館、旅館、ホテル、仮設住宅へと転々とした避難生活が始まる。
平成4年	8.8	土石流発生		・大規模土石流発生後、町内ごとに自分たちの今後の生活について話し合いを重ねた。 ・町内の代表者が集まり、体育館・避難所で現高上げ地区についての話し合いを始める。		
平成5年		火砕流、土石流随時発生	6.30 7.25	「安中三角地帯高上げ推進協議会」発足 安中三角地帯高上げ総決起大会 ・町内の代表者が町内1軒1軒を回り、高上げ事業についての同意を得るために奔走する。 随時、高上げ要望書を提出	災害が長期化し、いつになつたら帰ることができのだからう・・・	
平成7年	1.9 6.11	建設省:本導流堤工事に着工 安中三角地帯高上げ工事着工式				
平成8年	12.25	仮設住宅入居者ゼロ				
平成9年	11.16	雲仙普賢岳フェスティバル開催				
平成10年	3.20	安中地区土地区画整理事業工事安全祈願祭	9.5 11.15	雲仙普賢岳フェスティバル実行委員会発足 雲仙普賢岳フェスティバル98開催		
平成11年			1.1	安中地区まちづくり推進協議会発足 安中三角地帯で最初の住宅建設		・仮設住宅入居者ゼロ